

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372301202		
法人名	有限会社 トータルライフケア		
事業所名	グループホーム あゆみ		
所在地	熊本市富合町南田尻471		
自己評価作成日	平成23年8月25日	評価結果市町村受理日	平成23年11月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.in/kaigosin/infomationPublic.do?JCD=4372301202&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	平成23年9月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

昨年度よりセンター方式を活用し、一人ひとり一歩輝いていた時代を知るとともに、御本人がどうやって生活していきたいか、ニーズを把握し、皆で少しずつだが、共有できてきており、「考える」支援が出来る。そして会社全体でもOJTに力を入れており、認知症ケアの専門職としての知識、技術を習得できるように教育している。また、地域交流に力を入れ、地域交流会を3回と夏祭りを実施し、地域の方に来ていただき、どういところかを知って頂く機会になった。それから、区長さん民生委員さんの御協力もあり、近所で会えば、話しかけてくれたり、野菜を持ってきて頂くなどの交流が出来てきた。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人の運営方針に基づき、ホームの事業計画を策定し具体的目標が設定されている。昨年度から重点的に取り組んでいる「地域との交流」では、民生員・老人会・地域包括・ボランティア等、地域代表を3回に分けて招待し、利用者・職員との食事会を開催し交流を深めている。また、運営推進委員会への出席依頼を利用者と職員が持参し、委員会への協力を呼びかけた結果、ホームの存在が多くの人に知られるようになり、入所者やホームへの支援も高まりつつある。災害時の緊急連絡ボタンは、職員に止まらず、区長・消防団にも通報され、応援体制ができています。また、外部研修費用を支援し、職員の質の向上にも意欲的に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎日理念の唱和を行い、実践していくようにしている。また、「地域密着型施設とは」「地域とのつながりの大切さ」等を職員会議等で話している。	運営理念と実践のための5つの重点目標が掲げられている。その中の一つ「地域とのふれあい」に、より焦点をあて、職員会議の議題として定期的に話し合い、全職員の意識向上を図っている。「老人会に来てくれてありがとう」と声を掛けられた職員は、行事計画の中に地域への外出支援を増やすことを提案するなど、地域密着型サービスの意義を理解し、実践への成果が表れていることを伺うことができた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	月1回の資源ごみの日の収集のお手伝いや、年に2回の地域の清掃活動に職員が参加している。また、月に1回の老人会に職員が参加しており、日常的に交流を図っている。	民生委員・老人会・地域包括職員・ボランティア等、地域の人々を招き、利用者・職員との食事会を実施し交流を深めている。また、職員は老人会・清掃活動にも積極的に参加し、顔見知りになり、ホームの外でもふれあう機会が増えている。近隣の小中学校運動会では、テント内の観覧席に招待され、利用者も見学を楽しんでおり、日常的な交流がドンドン増えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	老人会にて、認知症の人に対する接し方や認知症とはという話をした。また、運営推進会議にて、ヒヤリハット報告や事故報告の中で、認知症の方の行動や言葉にできない思い等を伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回、運営推進会議に重要な事故報告の内容を伝え、対策などについて意見交換の場を設けている。それを職員会議に報告し、どういう意見が出たのか、今からのサービスにどう生かしていくのかを検討している。	家族代表・区長・老人会会長・民生委員・地域包括等の参加を得、熱心な議論が行なわれている様子が議事録から読み取れる。入居者の状況・活動内容等の報告に加え、事故やヒヤリハットの経緯を話し合ったり、地域交流・防災等に関して相談する等、職員と委員との双方向的な会議となっていた。また、会議内容は全職員に伝え、共有し、質の向上に活かす取り組みとなっていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	宇城のブロック会議に参加して、行政とのディスカッションという内容で意見交換した。また運営推進会議では、地域包括支援センターより職員に参加していただき、意見交換、情報公開に努めている。また、市介護支援相談員の方と連携をとり、利用者一人ひとりの状況をお伝えしている。	疑問や相談は、包括支援センター・市高齢者介護福祉課・市介護支援相談員等と連絡をとりながら対応できている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束、虐待について社内研修で学んでいるが、全ての職員が具体的な行為について正しく理解できているかは疑問。身体拘束をしないケアには取り組んでいるが、事故、ヒヤリハットの内容により、対策を立てた中で玄関の施錠、腰ベルトをしている現状。	離ホーム・ヒヤリハットの事例で、当該家族からの施錠の要望を検討した結果、安全確保のためにやむなく玄関を施錠している。管理者は、施錠の弊害を充分理解しながらも、納得しないままの施錠となっていることが理解できた。今後、自由な出入りを確保するための対策を検討することとしていた。	利用者の人権を守ることを基本とし、「どんなことがあっても拘束を行わない」姿勢は大切。離ホームの原因をひもとき、根本的な要因を知るための努力を期待したい。また、安全を確保しつつ抑圧感のない自由な暮らしを支援するために、家族の納得と理解を得るための取り組みも期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法についても社内研修を行い、意識を高めている。虐待に至らなくても、不適切なケアを見過ごすことのないような雰囲気作りに努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する社内研修もあったが、具体的な事業や制度の内容までは学んでおらず、活用できていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	質問や疑問に関しては、丁寧な説明を心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置し、自由にいつでも意見を言うようにはしているが、あまり意見が出ていない状況。利用者に関しては、要望、希望を常に把握するように努めている。	センター方式導入にあたり、利用者の生活歴を家族に聞く際、意見や要望も聴くことに努めている。今回の家族アンケート回答者全員が、「職員は家族の話を良く聞いてくれる」と回答しており、職員が、日頃から意見を聴くことに努めている様子が確認できた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議の中で職員から上がって来た意見や提案は運営会議で上げるようにしており、反映させている。	管理者は日頃から職員に「業務改善への気付き」を促し、職員会議で意見を発表することを奨励している。「利用者の昼食時は、掃除することを止めよう」、「排泄介助時の職員の動線について再考しよう」など、利用者を主体としたサービス提供と質の向上を図る職員の提案が運営に反映されていた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に2回目標をたて、全ての職員と面接を行い、目標についての評価を行っている。それを人事考課につなげている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者が職員一人ひとりの力量を把握し、それぞれに合った内容の研修等を促したり、教育し、代表者に報告している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人外の研修に積極的に参加できるように研修参加伺いを提出し、内容が添えば法人より料金免除等の配慮をしている。また、管理者は市と宇城地区2箇所のブロック会議に参加し、同業者との交流の機会を設けている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人、家族と面接を行い、生活についての要望に耳を傾けるようにしている。(センター方式によるアセスメントをとる)また、入居前のカンファレンスを行い、利用者の状況が皆で共有出来る様にし、気づいたことは、記録に残すように指導している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前に面接する中で、センター方式によるアセスメントを行い、家族の思いにも耳を傾けるようにする。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居のご相談があった時点で、その時何が必要なのか、支援を見極め、他の事業所を紹介したり、相談に乗っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	できないところを介助するだけではなく、センター方式を活用し、その方の輝いていた時代、趣味、嗜好を知ることにより、本人が自信を持って生きていけるような支援を目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が抱える悩みもニーズとして捉え、その方を含む環境も一緒に考えながら支援している。家族との繋がりが途絶えないように、月1回近況報告をし、面会の機会を作ってもらうような促しを行う。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人や場所を十分に把握しておらず、関係を途切れないような支援が十分ではない。	入居時情報に加え、センター方式の書き込み等で、利用者についての情報は少しずつ得られてきているものの、馴染みの関係を把握し、支援するまでには到っていないように伺えた。	地域の行事やお祭り等に参加する機会が増えると、知り合いとの出会いや、思い出話も広がり、馴染みの場所・関係継続への支援に役立つと思われる。また、家族の協力を依頼することも一案かと思われる。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を大切に、出来るだけ触れ合える様な職員の介入の方法を探ったり、記録に残したり、施設サービス計画書に掲げたりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所された後もご家族と連絡を取ることはある。相談があればもちろん応じる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式を活用し、認知症があっても少しの表情や仕草で感じ取り、記録に残せるようにし、皆で把握できるようにしている。	センター方式記入のため、生活歴を知ることが、利用者一人ひとりの行動の要因の理解に役立っている。早朝3時に起床し、「みんな起きろ、飯を炊け」という習慣がある人は、現役時代、海で働く家族を支えていたからだと分かったり、また、若いころ舞台に立ち、身綺麗にすることにこだわりを持っていた全介助の利用者に洗面の時間をゆっくりとしてみると、自分で整髪・洗面ができるようになったケースもある。利用者の背景を知ること、支援の仕方に変化が起き、利用者職員、双方のストレス軽減にも繋がっていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を活用し、把握に努めてはいるが、馴染みの暮らし方、環境づくりは不十分。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録に記録し、気づいたことを皆が共有し、朝の申し送りの中で、一日のリーダーを中心に注意すること、現状の把握に努めるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎週カンファレンスを実施し、介護計画の評価を行っている。現状に即していない場合は計画作成担当者に報告し、介護計画を新しいものに変更することとしている。	サービス計画表に基づきケアの提供を行い、日々の記録を実施し、カンファレンスで評価し、現状に即した計画作成を行なっている。居室には、一人ひとりのケアマニュアルが掲示され、一貫したケア提供に努めていた。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきや工夫を書くようにはしているが、まだまだ記録の書き方や、観察に個人差があり、十分に活かされていない。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族からリハビリをさせたいという要望があり、医療保険で通うことのできるデイケアを探している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生員さんの協力で昔ながらの遊びや、昔の写真を見ることにより、昔を思い出す機会となっている。また、地域ある図書館に出向き、好きな本を読むことができる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は基本本人、家族の要望に添う形をとり、協力医の情報は伝え、利点、不利益を伝え、選んでもらうようにしている。	本人と家族の希望に添った支援とし、受診は基本的には家族の同行としている。受診の際は、生活状況報告書を持参し、利用者の状態を主治医に正しく伝え、医師からのコメントや指示をもらうような方法を取り入れていた。投薬に関しての不安を軽減するために協力薬局との連携もできていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	異常時は早めに看護師に相談し、指示を仰ぐこと、早めの対応を連絡、報告をするように伝えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の地域連携室と連携を取り合い、スムーズな入退院が出来るような体制をとっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化指針を説明し、重度化した場合の希望や方針をまずお聞きし、その都度状況に合わせて、方針を確認しながら対応している。	入居時に重度化指針を説明し、「重度化・看取り支援に関する意向確認書」、また状態に応じて「看取り支援確認書」で確認しながら、意向に沿った支援を実施している。これまで2名の看取りを経験している。	2名の看取りの際は、グループ内の訪問看護事業所の支援が期待できたが、訪問看護事業所が廃止された現在、職員の不安が伺えた。今後の看取りに備えて、体制作り、職員研修等が必要かと思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応や、救急蘇生法の社内研修で学んでいる。また緊急時に何をしなければいけないのかのパターンを想定し、職員会議にて、KYTを実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	社内研修にて、防災対策を学ぶ。運営推進会議にて、地域の人とも色々な災害について意見交換をし、防止策、避難誘導方法などの協力体制を共有できた。	夜間体制を想定した火災避難訓練を実施。歩ける利用者全員と地域の人々・職員が参加。訓練後の運営推進会議では、地域代表から避難時の段差の問題や、地域の人々の利用者への対応の戸惑いなど、具体的な課題が出され検討されており、災害対策への真剣な取り組みが伺われた。消防署への緊急通報装置・スプリンクラーの設置も完了している。また、緊急通報ボタンが設置され、区長・消防団・法人社長・職員に繋がっており、区長から有線放送で地域応援を要請する体制もできている。水害等は、ホーム2階の法人事務所を避難場所としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	不適切なケアが行われていないか、常に職員の言葉掛けには気を配っており、どういふ対応がいいか、申し送り時に皆で考えるようにしている。	管理者は、行動を抑制するような言葉の使用、子どもっぽい声かけなどについて、不適切であり、重なれば虐待になることを職員に伝え、尊厳をもった温かいケアの提供を指導している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	施設サービス計画書の中で常に掲げ、皆が意識したケアが出来るように配慮している。しかし、まだ記録を見れば不十分。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日課が決まってはいるが、その人のペースに合わせて、希望に添うようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	センター方式により情報を共有し、特に身だしなみやおしゃれに気をつけていた方、に関しては、計画書に掲げ、ケアが統一して出来るような工夫をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	茶碗を一緒に洗ったり、おやつ作り等で出来ることを一緒に行っている。	食事は、隣接した有料老人ホームで作られ、有料老人ホームの担当者が休みの時だけホーム職員が調理している。春や秋はウッドデッキでおやつを食べたり、年に2回は回転すしに出掛けたり、家族会では外食したり、職員は朝・昼・夜、利用者と一緒に同じ食事をとり、会話しながら、食事を楽しむ支援をしていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その人がどういうものが好みか、温度、品物、形状を一人ひとり考え、提供している。また、一日に摂取できていない人がいるときは、申し送り、ゼリーをあげたり、栄養補助食品を提供したりして工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内スポンジを使用したり、うがいをしなくてもよい口腔ケアゼリーや、ガーゼなどを使用し、工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを把握し、時間で誘導することによって、リハビリパンツから布パンツと尿取りパットに変更した方が2名いる。	排泄チェック表で一人ひとりのパターンを探り、細かく把握し自立に向けた支援を行っている。排泄の失敗で落ち込みが酷い利用者には、本人が失敗に気づかないようにさりげなくパットを取り換える方法で統一し、職員間で共有し支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘2日目の方には、朝1番で牛乳を飲んでもらったり、便秘2日目以降の方は申し送りやピックアップし、ゆっくりトイレに座っていただいたり、食後早めに誘導したりの工夫は行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望を伝えられる方は、1名しかいないが、都合を聞いて、時間帯を決めている。変更するときは説明に伺う。また、その他の方も、いつの時間帯がいいのか、本人の状態を考えながら、その日の状況に応じて臨機応変に対応している。	2日に1度の入浴としているが、希望者は毎日入浴可能。入浴時いつも不快な表情だった入居者は言葉の表現ができず、職員も戸惑いがあったが、足湯や、かけ湯で優しくゆっくりとした入浴を支援し、ラジカセから音楽を流しながら入浴するようになったら、表情も明るく変化した。個々に沿った支援への努力が見られた。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	お一人の方は、自分の居室にゆっくりと休めず、不安に思っているのだろうと思い、談話室に布団を敷き、職員が常に見守れる所で休んで頂く。必要であれば、一緒に添い寝することもある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	とみあい薬局の薬剤師さんと連携を図り、薬の疑問にすぐ対応してもらっている。副作用等についてももしっかり説明してもらっており、理解している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	センター方式を活用し、その方の事をたくさん知り、日々の中で、自信のある生き生きとした生活が送れるように職員に伝えている。全員が時間を取れるように、職員がアクティビティの時間を取り、ケア予定表に入れるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望があまり聞けていないことが問題。生活歴の中で、こちらが行きたいのではないかと予測を立て、月に1度は外出の機会が出来るようにしている。日々の中で希望がもう少し出てくるように考えなければならない。	週に一度、個人レクレーションの時間があり、希望にそった外出が可能となっているが、外出の頻度は低いように伺えた。	屋内だけで過ごすストレスもたまりやすく、周辺症状の憎悪や体調不良も心配される。短時間でも戸外にでる機会を作り、外出場面を利用者と職員のストレス発散のチャンスとして活かすことを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っていないことへの不安を、言動でこちらが把握できた場合は、預かり金を見せて、安心してもらうことはある。しかし、お金を自分で持っている方は1名しかいない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	お中元、お歳暮が届いたときにお礼の電話を掛けたり、年賀状、暑中見舞いのはがきと一緒に書いて出している。しかし本人自ら電話を掛ける機会はない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	センター方式の中で、不安な刺激を考える機会がある。その中で、刺激を取り除くことは出来ているが、居心地良く過ごせるような工夫が足りない。	リビングを中心に台所・居室・談話室があり、人の気配を感じる安心感のある共有空間となっている。また、職員にとっては見守りしやすい作りとなっている。談話室に続くゆっくりしたウッドデッキは、外気を楽しめる場所となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファの配置や空間の確保に気を配ってはいるが、まだ各々が過ごせる空間が足りないと思う。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	担当職員がご家族と連絡を取り合いながら、少しずつは馴染みのものが増えてきてはいるが、まだ殺風景な部屋が多い。	箆笥の上に扇が飾られ、衣服が整頓されている部屋、畳敷きで何も置かれていないスッキリと片付いた部屋、大きなテレビがドーンと置かれている部屋、居室は家族に相談しながらのそれぞれの設えとなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所を分かりやすいように「便所」と表記し、位置を記した張り紙がある。お風呂場が分かるようなのれんがある。		